

野鳥たより

—北海道—

第53号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和58年9月21日



アメリカウズラシギ 鶴川 1982.9 柳沢千代子



もくじ

探鳥地案内(下沼)	2	
天売島の鳥	寺沢孝毅	3
国後島・野鳥の四季(2)夏	藤巻裕蔵	8
「感動」	新宅正太郎	8
探鳥会報告	野幌、植苗、福移	9
探鳥会案内		11
鳥民だより		12
編集後記		12

下 沼

探鳥地案内

22

◆位置 幌延町下沼

◆交通 国鉄宗谷本線下沼駅下車

◆概況 サロベツ原野パンケ沼の

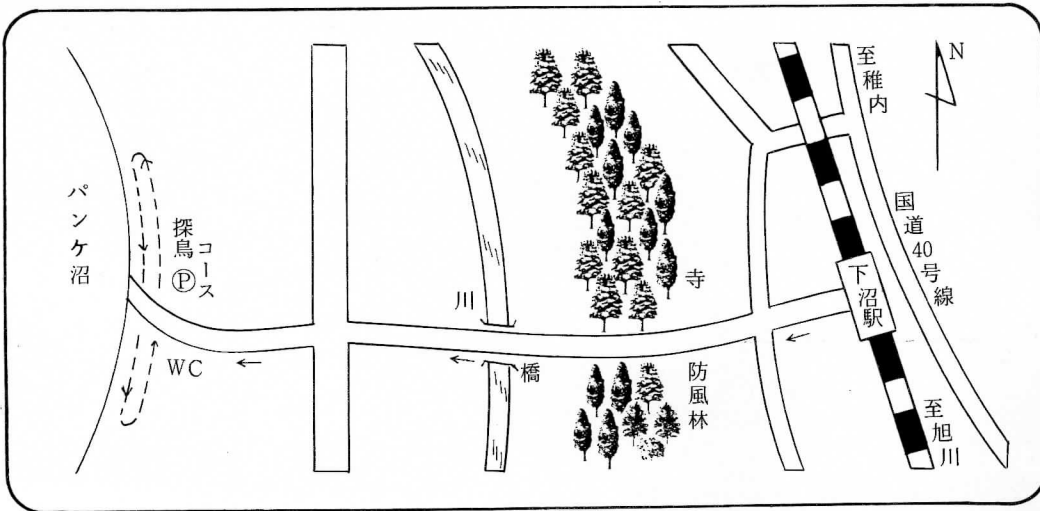
在る原野の南部にあたる。沼の周囲は一面、湿地帯と葦や笹からなる原野で、特に6月下旬から7月にかけて、カンゾウ等の花の間でヒナを育てる草原の鳥を見る事が出来る。また、春秋、4月と9月には上空を飛びヒシクイの群れも見れ、沼と反対方向の国道を越えた地域一帯は山になっており、山の鳥が見れる。

◆探鳥コース 約5km。下沼駅より沼に向って歩き出すとすぐに牧場や道端にホオアカ、ノビタキなどの囀りや姿を見る事が出来る。200m程行くと寺の裏に続いている防風林が道を横切っており、センダイムシクイ、エゾセンニユウ、アカゲラ、カラ類がいる。さらに150m程進むと橋を渡るが、運がよいとカワセミ、マガモ、ヨ

シガモを見れる。それから300m程で、牧草地は終り、原野に入る。パンケ沼へは水際まで道が付いており、探勝路があるので、そこを歩くとよい。パンケ沼周辺は特別保護地区になっているので、あちこち踏みつけて

貴重な植物を痛めない様気を配って欲しい。ここではコヨシキリとカッコウがうるさい位に鳴き、ノゴマ、シマアオジ、オオジュリン、ベニマシコが見れる。冬季間、除雪は寺までで終りだが、冬の間ではケアシノスリ、シロハヤブサが見られる。時々シマフクロウも記録されるが、広い原野に渡来数が少ないのでこれはよほど運がよくないと見られないので、暇を持って余した珍鳥ファンの探鳥といったところだろう。

◆上記以外に見られる鳥 アオサギ、ヒバリ、カワラヒワ、モズ、マキノセンニユウ、アリスイ、ハクセキレイ、オオジシギ、ミサゴ、アカエリカイツブリ、バン、クイナ、ショウドウツバメなど。



〒098-32 天塩郡幌延町栄団地23 富士元寿彦

天 売 島 の 鳥

寺 沢 孝 毅

昭和57年4月2日、教員として天売島に赴任して以来約1年5カ月が過ぎた。この間に島内、または天売島近海で観察された鳥について報告したいと思う。観察期間がたいへん短いため、天売島の鳥類リストとしてはまだまだ不十分であるが、何かの参考になる部分があれば幸いである。

本報告にあたり、石川県舩倉島のデータを提供して下さった日本野鳥の会石川支部の橘 映州氏に深く御礼の意を表す。

1. 天売島の概況

天売島は、羽幌町の西方約25kmの洋上に浮かぶ、面積543haの小島であり、天売焼尻道立自然公園に指定されている。

図1に示すように、天売島は標高184.5 mの三角点を最高とする北東から南西に斜めに横たわっており、北西向きの海岸は、赤岩から観音岬にかけて100 m以上の断崖が続いており、海鳥の繁殖地となっている。また、この断崖とは逆方向に向かってなだらかな傾斜が続いており、北東向き、南東向きの海岸には265戸、714人（昭和58年8月10日現在）の住民が住んでいる。

地質は新第3紀の安山岩質火山噴出岩類と、これをおおう、第4紀沖積世の海成段丘堆積物からなり、全部で5段面を形づくっている。標高184.5 mの三角地点か

ら北東方面へ1,500 mにわたっての平坦面は、イワヨモギ、エゾスカシユリ、とところどころにツリガネニンジンが見られ第1段丘を示し、その西～東に90m高度が約60m急斜面で境され、エゾカワラナデシコ、ザゼンソウ、センダイハギなどが見られる。これが第2段丘で、その下位には高度約70mの面が北北東へと続き、オオイタドリ、オオヨモギ、ウド等が生えており第3段丘となる。それから東方に約15mの斜面をばさんで高度約50mの第4段丘には、ススキ、オオヨモギ、ニンリンソウ、オオバナノエンレイソウなどが生えている。その下位高度約30m前後には、ミゾソバ、ススキ、ミツバ、エゾノギシギシ、セイヨウタンポポ、オオイタドリが生えている第5段丘がある。また、段丘面のいたるところがチシマザサに覆われている。

木本植物は現在は少ないのであるが、昔はかなり古い樹木があったそうである。中央の平坦部にアキカラマツを中心とする林が、東方丘上の墓地に多少の木があり、南西方台上にはヒロハノキハダの林がある。その他、イタヤカエデ、ナナカマド、オンコ、アカトドマツが知られている。

海岸には砂浜が少なく、石原ないし岩場となっている。また、河川もなく、春の雪融けの時期に沢地などに水が流れる程度であり、他の時期はほとんど涸れた状態

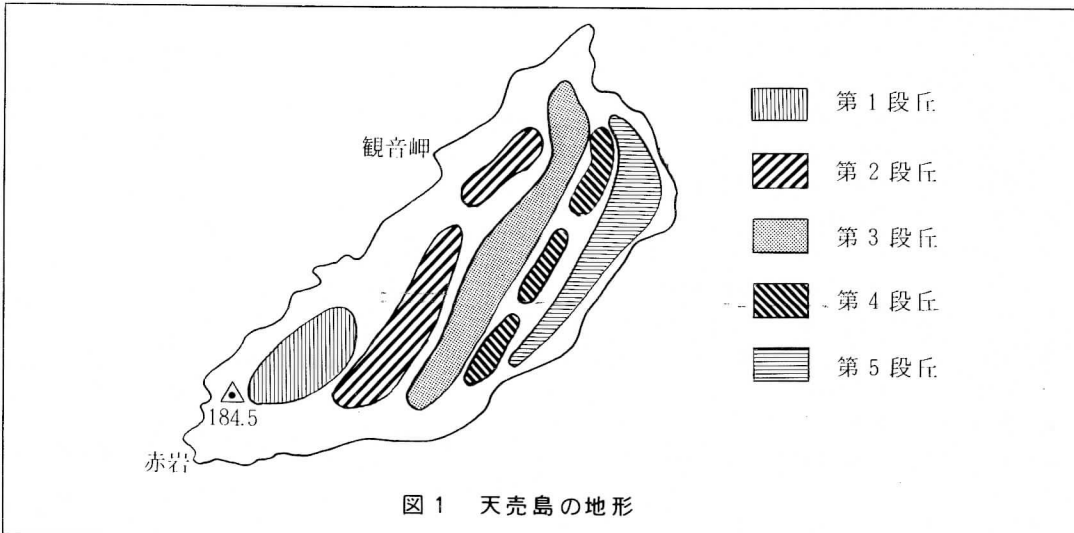


図1 天売島の地形

である。大きな沼などもなく、水道用の貯水池や小さな池が2カ所程あるにすぎず、いずれも10メートル四方程度のものである。

II. 観察期間

昭和57年4月2日から昭和58年8月28日まで。

III. 観察方法

観察は、島内全域にわたって随時行った。また、船を利用して島の周辺の海鳥についても観察を行ってきた。魚網にかかった海鳥、天売～羽幌間の定期船「天羽丸」に乗船時に確認された鳥も、記録の中に含めた。

IV 結果と考察

1年5カ月の間に、32科114種の鳥が記録された。それを月別に示すと図2のようになる。5月と10月に、出現した鳥の種類数のピークがあり、渡り鳥が渡りの途中で羽を休める地点としていかに重要であるかがうかがえる。春、秋の渡りの鳥相についてはまだまだ調べる余地が残されており、今後の観察によって、チドリ科、シド科、ヒタキ科などを中心に種類が増加するものと思われる。夏期における鳥相はきわめて貧弱であり、島の面積や植生などの関係で、島内で繁殖する種が少ないためと見られる。この時期、最も個体数が多く見られる種はノゴマ、ウグイス、コヨシキリ等であり、島内のいたる所で囀りを聞くことができる。

その他、特記すべき事項を何点かにわたって記してみたい。

1. サギ科の鳥

本島では、ヨシゴイ、ササゴイ、アカガシラサギ、チュウサギ、アオサギの5種類のサギ科の鳥が記録されている。このうち、ササゴイ、アカガシラサギ、チュウサギは道内ではたいへん稀な鳥とされている。しかし、ササゴイは57年6月3日、同年6月6日に2羽確認されており、さらに58年5月1～16日にも確認されている。また、チュウサギは58年6月3日に3羽、同年6月8日に1羽記録されているが、古くから島に住む人の話を聞けば、白鷺は昔から春になると見ることができると言い、数も昔の方が多かったと聞く。アカガシラサギは、全国的に見ても記録が少なく不規則な鳥であるが、本島に限っては規則的に飛来している。57年には5月20日から6月6日にかけて、58年には5月14日から6月2日にかけて、いずれも最低2羽は飛来している。56年5月にも、鳥獣保護監視員をされている青塚氏がこの鳥を確認しており、天売島は同種の規則的な渡りのコースであるという見方が強まっている。なお、同じ日本海に浮かぶ石川県舳倉島で51年5月5日より約1週間、53年5月5日に同種の記録があるのは興味深い。

2. ヤツガシラ

本島でのヤツガシラの記録は、3月下旬から4月末に

かけて多数ある。57年は4月20日、58年には3月23日から5日間、4月13、18、20、28日となっている。青塚氏の話によると、57年以前からヤツガシラは3月から4月にかけて島を訪れていたと言う。石川県舳倉島における記録を下に紹介してみる。

52年4月3日、4月9日、4月17日

53年4月17日、4月21～23日

54年4月21～22日

55年3月28～29日、4月26～29日、5月3～4日

同じ日本海に浮かぶ2つの島の記録を比較してみた時、ほぼ同じ時期にヤツガシラが出現していることがわかる。

以上のことより、ヤツガシラは日本海側沿いに渡りのコースを持つと考えてもよいのではないだろうか。

3. アカゲラ

アカゲラは、アリスイを除けば天売島に生息する唯一のキツツキ類である。亜種名で言うとエゾアカゲラである。アカゲラの亜種は、津軽海峡を境として北に生息するものをエゾアカゲラ、南の本州や伊豆諸島などに生息するものをアカゲラとしている。しかし、エゾアカゲラは海を渡るのである。天売島の場合、春から夏にかけての記録はなく、秋から冬にかけては多くの個体を見ることができるのである。昨年から今年にかけての記録は、初認が57年9月17日、終認が58年4月16日であった。

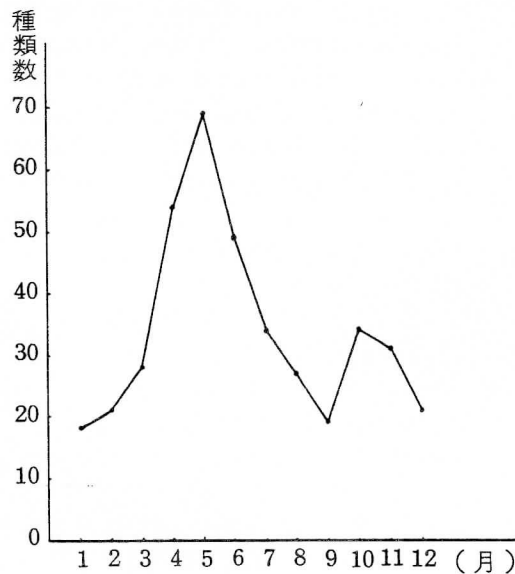


図2 天売島における鳥の月別種類数

舩倉島では3例のアカゲラの記録があるが、52年3月の記録の中にエゾアカゲラが含まれている。また、舩倉島より南にある山口県見島でも同垂種の記録があり、たいへん興味深い。この他に、同じような例で12月にシマエナガの渡りが見られる。

4. サンショウクイ

サンショウクイの分布は本州以南とされているが、このほど天売島で確認された。58年5月21日午前7時頃、人家付近の小さな林の木々を小さきみに漂行している1個体を発見し、カメラに納めることができた。人間を恐れる気配がなく、労せずして近づくことができた。昭和38年の黒田博士の報告に、「天売港の部落の裏に巣立ち雛を混じえ数羽を見る」と報じられている。今後の観察に注意を要する。

5. メボソムシクイ・キクイタダキ

5月と9月にはメボソムシクイが群れで島を通過する。秋の渡りの時期には、夜間出漁中のイカ釣り船に多くの個体数が休息するとの話を聞いたことがある。小学校の校舎内にも1日に3羽が迷行したことがあった。

キクイタダキもメボソムシクイとほとんど同時期に飛来し、秋の渡りにはその数が数万羽と思われるほどたいへん多く、島じゅうがキクイタダキに埋めつくされるといった感じである。大部分の個体は、枯れたオオヨモギなどの草丈がやや高い草本類が優占した草原を漂行しな

がら採餌し、林などを漂行するものは少ない。また、極端に人を恐れず1メートルほどまで近づくのも難しくはない。このキクイタダキの大群が、大陸方面から飛来した個体だとすれば、かなりの数が冬鳥として国内に飛来していることになるだろう。

V. おわりに

以上述べてきたように、天売島は渡り鳥の重要な中継地点であることは言うまでもない。天売島を通過する渡り鳥の中には迷鳥とされる種も含まれており、たいへん注目される。本島は面積の小さな小島であるため、たとえ少数しか渡来しない種でも目につきやすく、またサギ類などが集まる水辺もほぼ決まっており、渡り鳥を観察するには絶好の環境だと言える。

本報では、石川県舩倉島におけるデータを天売島におけるデータと比較検討してみたが、このように日本海に浮かぶ島々の調査をもっと充実させ、そのデータを比較することにより、日本海側を渡る鳥の鳥相やそのコースがある程度明確につかめるものと思われる。そちらの方の調査が今後進むことを期待したい。

〒078 一39 苫前郡羽幌町天売

天売島の鳥

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
カイツブリ科	アカエリカイツブリ			○									
ミズナギドリ科	ハイロミズナギドリ				○								
ウ科	ウミウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
サギ科	ヨシゴイ ササゴイ アカガシラサギ チュウサギ アオサギ				○	○	○		○				
ガンカモ科	オオハクチョウ オシロモ カルガモ コシビロガモ シノリガモ ウミアイサ	○				○	○				○	○	○

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ワシタカ科	トオケオノ ジロアス ワシノス ビシリスリ	○	○	○	○	○	○					○	○
ハヤブサ科	シロハヤブサ ハヤブサ チゴハヤブサ チョウゲンボウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
キジ科	コウライキジ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
シギ科	タカブシキ イソシギ ヤマシギ オオシギ オオジシギ				○		○	○	○	○	○	○	
ヒレアシギ科	ハイロヒレアシギ アカエリヒレアシギ					○		○	○				
カモメ科	オオセグロカモメ ワシカモメ シロカモメ ウミミネコメ ミツユビカモメ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ウミスズメ科	ウミガラズ ハシブトウミガラズ ケイマズ ウミスズメ コウミスズメ ウミトウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○
ハト科	キジバト アオバト				○	○	○	○	○				
ホトトギス科	カッコー ツッコウリ					○	○	○					
フクロウ科	オオコノハズク	58. 3. 25 空家で死体発見											
アマツバメ科	ハリオアマツバメ アマツバメ					○	○	○	○	○			
ヤツガシラ科	ヤツガシラ			○	○								
キツキ科	アリスイ アカゲイ	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
ヒバリ科	ヒバリ				○	○	○	○	○	○	○		
ツバメ科	ツバメ				○	○	○			○			
セキレイ科	キセキレイ ハクセキレイ ヒビズイ タヒバリ			○	○	○	○	○	○	○	○		
サンショウクイ科	サンショウクイ					○							
モズ科	モオモズ		○	○	○	○	○	○				○	○

科 目	種 名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
レンジャク科	キレンジャク ヒレンジャク										○		○ ○
ツグミ亜科	コノマド コルゴル ジョウビ ノビビ イトソヒ トラツ アカロ シツグ				○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○		○		○
ウグイス亜科	ヤブサイメ ウグゼンニ エゾセシキ コオヨシキ メボソムシ エゾムシ センダイ クイタダ				○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
ヒタキ亜科	キビタキ オオタル エゾビ コサメ				○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○							
エナガ科	エナガ												○
シジュウカラ科	ヒガ シジュウカラ	○	○	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
ホオジロ科	ホオジロ ホオジロ ホオジロ ホオジロ ホオジロ ホオジロ ホオジロ ホオジロ ホオジロ ホオジロ			○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
アトリ科	アカマ ベニ ベニ ウシ			○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ハタオリドリ科	スズメ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ムクドリ科	コムク ド			○	○	○	○	○ ○	○				
カラス科	ハシボソ ハシブト	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○

(32科 114種)

国後島・野鳥の四季(2)夏

藤巻裕蔵

夏は6月上旬から8月中旬までの2ヶ月半である。繁殖はこの期間に終了し、種によっては換羽をはじめ、群をつくりはじめる。

6月上旬には多くの鳥が繁殖をしており、キジバト、コルリ、アカハラ、コサメビタキ、キビタキ、ニューナイスズメ、ホオジロ、アオジは営巣、産卵中である。湖沼のカイツブリ、マガモ、ヨシガモ、バンでは6月中旬には幼鳥が見られる。6月いっぱいヤマシギのジスプレーが見られるが、オオジシギのジスプレーは6月上旬には終る。6月中旬には巣立ったハシボソガラスやハシブトガラスが群となり、時には山地にやってくることもある。6月上～中旬にはエナガ、シジュウカラ、ヤマガラ、ハシブトガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、キクイタダキの単立幼鳥が現れはじめ、夏鳥でも早く渡来したヒバリやムクドリでも幼鳥が出はじめる(表参照)。

6月前半には霧や霧雨のことが多く、林の中は晴れた日でもむし暑い。6月中旬頃までに草は1mくらいになり、ヨブスマソウ、オニシモツケ、オオイタドリ、オオバセンキュウが茂り、チシマザクラ、ハマナス、オニグルミ、ナナカマド、ハマナスの花が咲く、そしてセミがなきだし、林の中ではカやブヨが多くなる。

6月の後半には多くの鳥で幼鳥が巣立つ、ノスリ、ヤマシギ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、コルリ、トラツグミ、アカハラ、モズ、ヤブサメ、ニューナイスズメ、カワラヒワ、ホオジロ、アオジである。この時期センダイムシクイ、キビタキ、オオルリはまだ抱卵中で、遅く渡来するシマセンニュウ、エゾセンニュウ、マキノセンニュウ、コムクドリ、シマアオジは産卵期である。森林ではシジュウカラ類、ゴジュウカラ、キバシリ、キクイタダキの混群が見られ、これにコゲラが加わることがある。

6月末に高茎草本は2mをこす。林ではホウノキ、ガマズミ、ミヤマカタビ、チョウセンゴミシ、ツルウメモドキや草本類の花が咲き、沼ではミツガシワ、クロバ

ナロウゲ、ヒルムシロの花が咲く、他の動物ではアオダイショウ、シマヘビ、アマガエルが姿を現す。

7月上旬には、センダイムシクイ、エゾムシクイ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリ、ビンズイ、ベニマシコ、クロジ、ホオアカ、シマアオジが巣立つ、7月中旬にはスズメとアオジは2回目の繁殖を始める。遅く渡来するセンニュウ類も7月末には育雛を終える。鳥によっては、1回目の繁殖に失敗すると、中旬に2回目の繁殖を始める、7月末にはコムクドリが群となっている。

海岸では7月上旬に繁殖を終えたオオセグロカモメやウミネコが群で現れ、7月末にはキアシシギ、トウネンなどのシギ類が渡り始める。スズメ目の鳥類の多くは換羽を始めている。

1962、63年の7月の天候は不順で、7月上旬にタラノキ、コウライテンナンショウ、ウド、オオウバユリの花が咲き、7月後半になってツタウルシ、ハシドイ、サルナシ、ツルアジサイの花が咲いた。

8月中旬までには、遅く渡来した種の繁殖ややりなおしの繁殖も終った。このほか夏中、国後島の北西沿岸で繁殖していないと思われるアオバト、ブッポウソウ、ヒヨドリ、サンショウクイ、イカルが見られた。

〒080 帯広市稲田町西2線13

表2. 巣立幼鳥の出現時期(1962-63年)

シジュウカラ	6月14日(1962)	ニューナイスズメ	6月30日(1962)
スズメ	6月15日(1963)	ノビタキ	6月30日(1962)
"	6月19日(1962)	トラツグミ	7月2日(1962)
ヤブサメ	6月26日(1963)	エゾムシクイ	7月3日(1962)
ハシブトガラ	6月26日(1962)	ビンズイ	7月3日(1962)
ヒガラ	6月26日(1962)	キビタキ	7月6日(1962)
モズ	6月26日(1962)	ムクドリ	7月9日(1963)
ミソサザイ	6月27日(1963)	ハクセキレイ	7月14日(1962)
アオジ	6月27日(1962)	ベニマシコ	7月14日(1962)
アカハラ	6月27日(1962)	オオルリ	7月16日(1962)
キクイタダキ	6月27日(1962)	センダイムシクイ	7月16日(1962)

感

動

新宅正太郎

「感動」と出逢った場所として、寮が数棟並んでいる所を想像して欲しい。昭和58年1月18日の午前10時半頃、隣の建物の北側の日陰で地上に何か黒い物の上に

止っている1羽のタカを見つけた。最初見つけた場所からそのタカとの距離は約20m、建物から僅かに3mぐらいしか離れてはいない。もちろん、見つけた場所(自

分の居る場所)は道路上なので、ほかにも通行人は結構居る。

この様な状況の場所でそのタカは、まるで傷を負って飛べない鳥のようにじっとしている。隣りに居た人が「どこか、外傷を負っているんじゃないですか？」という程である。光と影が雪で混じり、反射して体色がわからないので断定は出来ないが、おそらく、季節、場所、大きさを考え合わせて、ハヤブサではないかと思った。

双眼鏡など持ち合わせていず、そのままにしていればいいものを、どうしても何であるかその種類を確かめたいという衝動に負け、恥かしさを覚えながら近づいてみることにした。初め、ゆっくり近づいてみた。当然、タカは最初からこちらを向いている。ところが、こちらを向いているにもかかわらず、普通我々が少しでも近づく様子を見せようものなら、すぐ逃げる鳥の反応とはまるで違う。不思議に思った。やがて、タカとの距離が10mぐらいになった時、困った、溝がある。1mぐらいの幅の下水道である。仕方がないので、目はタカを見ながら、頭の中には飛び立って逃げるタカの不安な様子を想像しながら、その溝を飛び越えた。が、タカは期待に反して(?)まだ、そのまま、こっちを向いている。更に進んでタカとの距離が5m内外に達して自分自身日陰に入りタカの体色を確認した時、やっと(?) (やはり)ハヤブサは飛び立った。

この時、強い「感動」を覚えた。というのは、この「飛び立ち」という事、いままで感じた事のない鳥の動作だったのである。明らかに群れている鳥が飛び立つ時の「飛び立ち」とは違うし、また、普段よく見る小鳥、水鳥、その他の野鳥に人が近づいた時の反応である「飛

び立ち」とも違う。前者は仲間同士が合図して次の場所に移動していく、ただそれだけの様に見える、後者は「飛び立ち」と言うより「逃げる」と言う表現が相応しい様に思える。今迄見て経験したいろいろな「飛び立ち」を思い浮かべてもどれも当てはまらない。「移動」でもない「逃げる」でもない「飛び立ち」であった。

今迄、猛禽類を見た事がない訳ではない。九州の福岡に居る時、ピッ、クイーと鳴いているサシバを10mぐらい近づいて見たことがある。しかし、この時も「飛び立つ」より「逃げる」が表現としては近い様な気がする。もっとも、この時のサシバは、山の中の木の上に居たせいもあるかもしれないが……。トビにしてもそうである。トビも一応、猛禽類である。ワシタカ科なのだから。しかし、いつ見ても逃げて居る。

猛禽類の虜になっている人達は何人も居るが、今日、その理由が一つわかった様な気がする。

威風堂々、まさにそれである。

目をハヤブサの足元に戻してみると、少し可哀想でもあるがハヤブサの乗っていた黒い物、それは石でもなく、杭でもなく、当然鳥であった。この鳥は、いつもこの辺りを飛び回っているドバトで、既に頭はちぎられ羽毛も胸のあたりは、殆んど無かった。

ここで、この事をメモしているうちに矛盾を感じたのである。それは、同じドバトでも事故に合ったりして、つまり、空気銃で撃たれたとか、電線で傷を負ったとかいう状態を見つけた時などは、間違いなく「少し」のない可哀想を思うはずだが、それどころか、実際、この様なハヤブサの餌となっている状態を見た瞬間は、少し可哀想の「少し」も感じなかったのである。

〒080 帯広市南町南7線番外地5通2中



野 幌

58.5.8 泉屋恵津子

藤野の山里に住み、ベランダにバードテーブルを置いてガラス越しに、小鳥を眺めてから13年

になる。83才の祖父は、朝夕、餌の世話に余念なく、主人は暇をみては、カメラを据えて、今迄に何十枚もの小鳥の写真を写している。私達は、この春、結婚25周年を迎えた。これから夫婦二人で、何か共通した趣味を持ちたいと話合っていた。今年の1月のある日曜日の朝、主人が突然、「今日藤の沢の白鳥園へ鳥を見に行こうか」との誘う言葉に、早速、双眼鏡を手に出かけた。

小鳥の村の村長さんがいらっしゃる園には、小鳥を愛する同志が大勢集まって、プタ汁を御馳走してくれた。

北海道野鳥愛護会、野鳥保護団体のメンバーであった。私は世にこのような、すばらしいグループがあったのか、と深く感動させられた。3月には、春浅いウトナイ湖へ、白鳥を見に出かけた。北へ帰る無数の渡り鳥の群、茶色いマガンの群にまじって、ただ一羽白ガンをを見つけ、輝くように白い羽を光らせて、舞い上る姿に、愛好家達は歓声をあげていた。仲間はどうしたのだろうか一羽だけ迷い込んできまり悪くないのかしらと私は主人に問うていた。今頃、シベリヤの長旅に発つだろうか。4月には、野幌森林公園へ早朝6時に家を出て、集合場所へ急いだ。白い水ばしょうの群生に春を感じ、樹間を飛び交う野鳥の姿を目で追いながら、さえぎりに耳を傾けた。尾の長い純白のエナガ鳥を見つけて、その小柄で可

憐な姿に感激した。もう一度、会いたいと思った。そして、5月8日は二度目の野幌への探鳥会となり、早朝のヒンヤリとした空気の中、同志の方達の顔に会えて心なごみ、来て良かったと思った。

今月は10日より、愛鳥週間を迎え、感慨もひと際深みを感じる此頃、先輩や同志の方々の横顔に接して、主人も私もとても満足した。5月の若葉かおる林道を、約5キロのコースに渡って、道端の紫色のタチツボスミレの可憐さにふれ、木陰にゆれる白いオオバナエンレイ草の話に花を咲かせて、散策路の奥へ踏み入った。まだ知らない小鳥や、この間会ったエナガの影を求めて、「キビタキがいる」、同志の興奮した声に胸をおどらせ、私達も見つけた。おとぎの国の青い鳥小鳥、あの鳥なのである。本当に見てしまったと言う感じである。シーシーと頭上から沢に抜ける様に、にぶい音でとてもけだるく鳴き続けるヤブサメの声に、天の鳥の聖域に立ち入っている事を感じる。空には一羽のアオサギが舞い。メジロが最後のご奉公に鳴いているよ、と先輩が教えてくれる今回は、エナガが見つけれないかも知れない、と道すがら嘆くと、キビタキを見たから、諦めなさい、と主人に慰められた。林も外れ近い所になっても、主人

は私のために、エナガの影を追っていた。これからも機会があれば、主人とともに参加して健康的な趣味を深めて、夫婦の絆にしたいと思う。

〔記録された鳥〕 カイツブリ アオサギ キンクロハジロ トビ ハイタカ ヤマシギ オオジシギ キジバト カワセミ ヤマガラ アカゲラ オオアカゲラ コゲラ ヒバリ ハクセキレイ ヒヨドリ ルリビタキ クロツグミ ヤブサメ ウグイス エゾムシクイ センダイムシクイ キクイタダキ キビタキ オオルリ エナガ ハシブトガラ ヒガラ ヤマガラ シジュウカラ ゴジュウカラ キバシリ メジロ ホオアカ アオジ カワラヒワ イカル シメ ニュウナイスズメ ムクドリ カケス ハシボソガラス ハシブトガラス 以上44種

〔参加者〕 長谷川涼子 新宮康生 福井スエ 岩泉ゆう子 羽田恭子 小林清勇 横田通典 田辺 至 道川 弘・富美子 泉屋宜志・恵津子 早瀬広司 渡辺紀久雄 柳沢信雄・千代子 五十嵐優幸 岡田幹夫 野口正男 小山内光之 戸津高保 (以上21名)

〔担当幹事〕 柳沢信夫・千代子

〒061-22 札幌市南区藤野550 の45

植 苗

「6時半に起きて間に合うよ」と言いかせていた孫の由佳に「お祖母ちゃん雨降ってないよ」と早々と起こされてしまった。重い腰をしぶしぶと言う感じで、雨と寒さを気にし乍ら探鳥会に参加の為汽車に乗り、無人駅の植苗に降りた。自然と接する機会を出来るだけ多くと思いつつも鳥の姿を探したり、声を聞き合わせる等とは特に無縁の毎日なので、まずは歩くだけでも良いなあという思いで参加しました。先日4時起きし5時集合の円山公園探鳥会に初めて参加した時より鳥の声は少く、か弱い声だなあと思い乍ら、遠くの鳴声をたよりに姿を追えども姿は見えず、若葉だけが風にゆられ、ひょうひょうとうなっているだけです。じいっと原野に立って耳をすますと鳥は勿論草の名も樹木の名も見わかる術を知らない自分が、すごく無力に思えて永い年月のこしかたを強く反省させられました。

其の中に望遠鏡をかついでいらっしやる何人かの方々は、鳥の姿を見届けると間をおかず焦点を合わせて、其の小さな美しい鳥の姿を見せて下さるのでした。それはもう感激のきわみ、胸や羽を染めわけた小さい姿は生きてる生きてる胸を張って生きていると言っている様でした。精一杯頑張ってねと念じてやみません。小さい虫や毛虫がすごく多いので辟易していたのですがこれは鳥の餌なのだと思いました。聞くともなく聞いている鳥の声も条件が揃わなければ鳴いてはくれないのだなあ、あらためて共存共栄のしくみを考えさせられた思いで

58.6.19 八田幸子 矢内由佳(小3)

す。歩を進めるうちに鳥が少しは肉眼でとらえる事が出来る様になりました。馴れるとは楽しいですね。それにしても重い望遠鏡を持つては片田舎に降り立って無知の私共をひっぱって行って下さる幹事の方等すごーくえらい人に思います。北海道特有の寒々とした原野にも色々なドラマが有る事を知り、バスの窓や汽車の窓からは何い知る事の出来ないそれぞれの生活のそのほんの一端にじかに触れ心良い疲れが残りました。孫の由佳はかっこうの声と姿にとっても感激した様でした。

帰路は孫と二人話はずんだのは勿論です。由佳は探鳥会に又参加したいのだそうです。

わたしは、ときどきたん鳥会が、あると、早おきをします。なぜか、たのしいからです。それは、鳥を見るからだと思います。今日は、とくべつおもしろかったで

地下でつと汽車にのって行きました。汽車にのっているときは、ぜんぜんつまなくて、そわそわしました。

汽車からおりと、9時6分でした。「まにあうかな？」とわたしは、思いました。でもまにあいました。歩いて、草はらにつくと、鳥の声が聞えました。見つけようとしても、わかりませんでした。そして、だれかに大きなほうえんきょうで、見せてもらいました。どんどんおくへ行くと、虫がいっぱいいました。すごく小さい虫もいました。とちゅうでカッコウもいました。カッコウのすがたをうまれてはじめて見ました。さいごに白い花を見つけました。帰りに雨がふりました。えきの中に

はいつお昼をたべました。かえりに汽車と地下でつにのてかえりました。とてもおもしろかったです。

又おばあちゃんと、いっしょに行くやくそくをしました。たのしみにしています。

〔記録された鳥〕 アオサギ マガモ トビ キジ オオジシギ カモメ キジバト カッコウ ツツドリ アカゲラ ヒバリ ショウドウツバメ ビンズイ ヒヨドリ モズ ノビタキ アカハラ エゾセンニュウ シマセンニュウ マキノセンニュウ コヨシキリ オオヨシキリ センダイムシクイ キビタキ ハシブトガラ シジュウカラ ホオジロ ホオアカ シマアオジ アオジ オオジュリン カワラヒワ ベニマシコ シメ スズメ ムクドリ ハシブトガラス コサギ ハジロクロハ

福 移

札幌を離れて20余年が過ぎ、昨年思いがけなく札幌の土を踏むことが出来ました。その昔は、野鳥とは無縁というより関心がなく、ひたすら山歩きに没頭していました。自分では北海道の自然をこよなく愛していた…と自負していたのですが、今想うと、北海道の野鳥に気づかずにいたことが悔まれてなりません。帰り住むことが出来ないと思うと、望郷の情も一入ですが、東京砂漠の日々の中で、野鳥を愛する人々と出会い、山歩きの出来なくなった頃から、同好の一人となりましたが、その時から、北海道への探鳥の旅を夢みて来ました。

その日が実現した昨春から、ウトナイ湖、円山公園通いを夏冬続け、あっという間に、一年が過ぎました。今年、20年ぶりに、旧友早瀬君と旧交を温めることになりましたが、これ又不思議なことに、東京と札幌で、野鳥をお互に観ていたこととて、早速、色々教えを乞い、野幌森林公園を知っての、はじめの訪問で、夢にも見たことのない、アカショウビンの営巣中の番を、小一時間も観ることが出来ました。植苗では、風が強く、鳥影も少く絶望と思われたノゴマを見つけてくれました。これも生まれてはじめてです。ノビタキ、アカモズ、オオジュリン、シマアオジ シマセンニュウなどは、東京地方はなかなか見れません。未だ見ぬベニマシコの話か



1月までの予定です。ウトナイ湖ではガンカモの仲間、小樽ではカモメやカモの仲間を、そして藤の沢ではバードテーブルに集まる鳥達を寒さにまげずび御参加ください。

<ウトナイ湖> S58年11月13日 午前10時 ウトナイ

<小樽港> S58年12月11日 午前10時 国鉄小樽駅 (観察はバス利用となるはずですので700円ほど参加費はかかります)

ラアジサシ (コブハクチヨウ) (40種)

〔参加者〕 泉屋宜志・恵津子 上野智恵子 真田伊津子 矢口兼江 戸津高保・以知子 岡本敬子 太田タミ子 曾根モト 渡部 幸 八田幸子 矢内由佳 大坊幸七 野口正男 豊田 裕 霜村耕介・耕一 羽田恭子 清水幸 中 博道・まり子 稲垣浩司 青木二郎 谷口登志 道川 弘・富美子 天童雅俊 河野妙子 荒 克紀黒田聖子 長瀬清吉 安達正良 柳沢信雄・千代子 新田順子 野村梧郎 関口健一 丸子勝彦 黒畑重雄 栃本文子 長谷川涼子 (42名)

〔担当幹事〕 野村梧郎 関口健一 長谷川涼子

〒064 札幌市中央区大通西2丁目

58.7.3 角田耕一

ら、今日の探鳥会へつれて来てくれたのですが、果して?とあいつも、期待を持って彼の後について歩き続けました。彼の心が又通じたのか、彼の無言で指差す目の前の葎に、ベニマシコが囀っているではありませんか…。胸がしめつけられる様な感動…。はじめて鳥を観る時の、この瞬間も探鳥会の魅力でもあります。又…この感動を…と願いつら、勉強して参りたいと思います。友と野鳥ありて、吾人生は幸せです。

〔記録された鳥〕 アオサギ トビ チュウヒ ウズライソシギ オオセグロカモメ ウミネコ キジバト カッコウ ヒバリ ショウドウツバメ ハクセキレイ モズ アカモズ ノゴマ ノビタキ アカハラ シマセンニュウ コヨシキリ オオヨシキリ ホオアカ シマアオジ アオジ オオジュリン カワラヒワ ベニマシコ スズメ ムクドリ ハシボソガラス 以上 29種

〔参加者〕 角田耕一・房子 太田タミ子 真田伊津子 谷口一芳・登志 泉屋宜志・恵津子 曾根モト 青木二郎 武沢和義 工藤敏人 五十嵐優幸 柳沢千代子 新宮康生 戸津高保・以知子 大坊幸七 早瀬広司 羽田恭子 道川 弘・富美子 横田通典 犬飼 弘 野々村 菊 天童雅俊 萩 千賀 小堀煌治 長谷川涼子 (29名)

〔担当幹事〕 早瀬広司 横田通典 道川富美子

〒001 札幌市北区北36条西7丁目インペリアル麻生

<藤の沢> S59年1月24日 午前10時 定鉄バス定山溪藤の沢下車 白鳥園 (徒歩20分) (特制ブタ汁などが付く楽しい行事があります。参加費500円ほど。)

<野幌森林公園を歩きましょう>

上記探鳥会のほかに次の探鳥散歩を行います。

11月20日、12月4日 大沢口駐車場入口 午前9時30分集合、又は百年記念塔前8時30分集合です。大雨や暴風雪以外は行ないます。昼食、筆記用具、観察用具ご持参ください。防寒には十分御注意ください。

探鳥会の問い合わせは早瀬まで(011)611-0949



◆第1回 前田一步園賞受賞
財団法人前田一步園が自然保護に顕著な貢献のあった個人、団体に贈る第1回の賞なので北海道知事推せん厳重な審査の結果、個人紅林晃氏、団体北海道野鳥愛護会が受賞ときまり、去る8月30日釧路支庁で表彰式が行われました。会から会長に代わって柳沢幹事

が出席し、表彰状と副賞10万円を受けてきました。

前田一步園財団は阿寒の自然を守り「湖畔の母」と慕われた故前田光子さんの遺志で発足した財団です。

なお、前田一步園財団については、次号で詳しく御紹介したいと思います。

◆第2回定例幹事会

7月6日(水)札幌市婦人文化センター18:30~21:00、出席幹事は12名でした。決定したことは、野鳥だよりのバック・ナンバーの残部が、1部200円、送料は希望者負担で販売されることになった。地方連絡員については何度も話題にはなっているが、組織を作るにいたっていない。今年は幹事が個人的に地方の人に記事を書いて貰うよう依頼するという事になった。探鳥会に貸切りバスを利用してはどうかと提案があった。鶴川のような遠隔地でしかも自動車賃が高く、交通の不便な処では計算上実現性はある。しかしどのようにして会員外に連絡するか、希望者のバス代の徴集、希望者の不参加による欠損金の負担等の問題が論議され、探鳥会は今までどおり、現地集合、現地解散を原則とすることになった。そのほか、野鳥だより52号の編集状況の報告があり、入会の案内状とチェック・リストの印刷については総務で、検討することになった。

◆第3回定例幹事会

8月3日(水)婦人文化センター 18:00~20:30
出席幹事は10名でした。道新スポーツから森林浴行

事の依頼がありそれに参加した幹事からの報告がありましたほかは、特に重要な議題はありませんでした。

◆バンディング講習会の御案内

9月23日~11月23日まで福島潟1級鳥類観測ステーションにて、詳しくは山階鳥類研究所 標識研究室 (03) 463-0410まで5日間以上の参加が必要です。

◆野鳥だよりのバックナンバーの頒布ご案内

会員のみな様に野鳥だよりのバックナンバーを頒布いたすことになりました。36号(54年6月)より51号まで、いずれも90~120部の在庫があります。(但し45号は在庫なしです)各号の内容につきましては、50号の総目録をご覧いただければ便利かと思ひます。

頒価は1部200円、送料は1部70円、3部まで170円、8部まで240円、16部までは350円です。申込みは頒価に送料を添え、郵便振替でお願いいたします。なお、勝手ですがこちらの事務手続の都合上、お手元に届くまで1ヶ月ほど要する場合がありますことを予めご了承願ひます。

◆お心当りはありませんか

今春、野幌森林公園内の四季美コースで、北大図書刊行会発行の「北海道の鳥」が一冊拾われ届けられています。

「57. 5.30 a m4:00~、と書いた小紙片が2枚かかえて添付されており、鳥名・鳴声が片仮名と平仮名で書かれ、数字も書かれています。そのほか書き込みが各所にあります。

かなり使いこまれた本です。とりあえず保管していますので、お心当りのかたは下記にご連絡ください。

札幌市白石区厚別町小野幌
野幌公園事務所 公園利用課
電話011-898-0455~0459

〔編集後記〕

毎年9月になると思いますが、今から15年ほど前カナダのバンクーバーに行っていたことがあります。スタンレーパークの池には、それこそぎょうさんのカモ達がおまして、当時は、おはずかしい話ですがみんな飼い鳥かと思っていました。(なにしろ街のすぐ近く

です)もちろん識別能力ゼロですから今にして思えばくやしいかぎりです。日本では見られないカモもいたに違いありません。その頃、もう少し野性の動植物に興味を持っていただければと思ひ返しています。野鳥をどうして自然に親しみ環境問題にまで心の眼を開らなければ、そういう人が一人でも多くなってくれるよう探鳥会の参加者がふえることを期待しています。 北尾 記

〔北海道野鳥愛護会〕年会費1,500円(会計年度4月より)郵便振替 小樽 1-18287

☎ 060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付 ☎ (011) 251-5465